

属の研究に着手した際御架藏の *Flora Ochotensis* その他の貴重なる文献を御貸與の上種々御垂教御助言を賜つた。久しきに亙る学恩を想ひ感謝の言葉を知らない。唯々謹んで御礼を申上る次第である。

主な文献 (1) Trautvetter & Meyer, 1856. *Flora Ochotensis phanerogama*. —(2) Regel and Tiling, 1858, *Flora Ajanensis*. —(3) Andersson, 1867, *Monographia Salicum*. —(4) Schmidt, 1868, *Reisen im Amurlande und auf der Insel Sachalin*. —(5) 松村任三, 1895, 改正増補植物名彙, —(6) 徳淵永治郎, 18'6, 北海道自生楊柳屬種に就き, 植物學雜誌第十卷. —(7) 白井光太郎, 1904, 日本楊柳科植物圖説. 植物學雜誌第十八卷. —(8) Koidzumi, 1913. *Spicilegium Salicum Japonensium novarum aut imperfecte cognitarum*. —(9) 工藤祐舜. 1922, 日本有用樹木分類學. —(10) 木村有香, 1928, 楊柳科の一新屬 *Toisusu* 及びその分類學上の位置. 植物學雜誌第四十二卷. —(11) 1934, *Salicaceae in Miyabe and Kudo, Flora of Hokkaido and Saghalien IV. Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. XXVI. Pt. 4.* —(12) Nasarov, 1936, *Salix in Komarov, Fl. URSS, V.* —(13) 1937, *Salicaceae in Fedtschenko, Flora Transbaicalica.*

○博物館で出版した“櫻の圖譜”について “櫻の圖譜は自分が監督して天産部で作つたのであるが、費用の関係でその後芸術部に引き継がれた。当時の事務長が印刷に興味をもつていた人で、この図を印刷に付することになったが、博物館の機構改革が何かで、新聞紙半頁大の原色石版刷が3枚出来ただけで、後が続かなかつた。それはソメキヨシノとナラヤヘザクラとミネザクラである。(最後の種については別項参照) しかし原図は沢山出来ていて現在國立博物館に保存されている。印刷は三秀舎の縁つづきの方英舎の小芝英君が引き受けた。ソメキヨシノは上野公園の樹で画かせた。始めは解剖図を入れる心算であつたので、図の周りが少し空き過ぎている。未出版の図の中、オホシマザクラだけは自分で書いたものである。本場の大島に行つて見なければならぬと言ふことになつて、船に乗つて出かけたが、未だ花が咲いていなかった。仕方がなく旅館に数日滞在して、花の開くのを待つて仕上げて來た。

ナラヤヘザクラの図は麻布飯倉の徳川頼倫侯の屋敷の中にあつた樹によつたものである。鈴木彦一と言ふ人が探つて來てくれたので、初めてあの櫻が東京にもあることが判つた。材料がよかつたのでよい図がとれて満足した。頼倫侯は其の後代々木に移つたが、あの樹が大木であつたから移植はしなかつたものと思う。あの図が出来たのは確か大正に入つてからである。ナラヤヘザクラは奈良縣師範學校に1本あつて、土地の人は他にはないと思つてゐるが、そんなものではない。那須の温泉場の一番高い所にある家の庭でも見たことがあるし、山形縣の標本を見たこともある。多分山の中に自生品があるのだらう。中井博士は鹿児島縣で見たと言ふが、その方にも自生があるかも知れない。櫻を研究する人は毎年日本中を花行脚する必要があるらう。そうすればまだまだ新発見があるだらう。”

(牧野先生一夕話 V. 一文責在編輯)